

# 恐山のイタコ：報告と考察

## —闇の中の開眼—

神 徳 昭 甫

日時：平成16年10月9日

場所：青森県むつ市恐山<sup>1</sup> 菩提寺

イタコ<sup>2</sup>：平田アサ

依頼者：上田秋子（仮名）

目的：「口寄せ」を実地調査して宗教学におけるイタコの位置を確認すること。

### I 報告

上記のような要領で平成16年10月8日～10日間の「恐山秋詣り」において行われたイタコの「口寄せ」（ホトケおろし）の実状を現地調査した。以下に巫女（イタコ）：平田アサと依頼者：上田秋子の間で交わされた会話、及びおろされたホトケの「霊」と依頼者の間の「対話」を間近に見聞した筆者が、その一部始終をテープレコーダーに録音をし、後にその音声を転写したものを記す。（なお、依頼者は筆者の知人であり、平成8年7月1日に死去した本人の実父の「口寄せ」を平田アサ巫女に依頼したものである。）

例：依→依頼者、

巫→巫女

依：平成八年七月一日に亡くなりました。

巫：おたくの…？

依：ええ、父です。

巫：父親…。七月のついたち？

依：ええ、七月のついたちに亡くなりました。

---

1 「日本三大霊場（恐山、白山、立山）の一つで、862年に慈覚大師が開山したと言われて」おり「人の死後靈魂がここに常住すると信じられて」（むつ商工会議所ホームページ）いる。

2 イタコは同じ青森県でも八戸では「おかみん、ボサマ」、弘前や津軽地方、さらに秋田県では「ゴミソ、カミサマ」などと呼ばれて相互間の識別は困難であるが「イタコには盲人が多いがゴミソにはいない」（江田<sup>1</sup>128-137；江田<sup>2</sup>137-151）、「『口寄せ』をするのがイタコであり、しないのがゴミソである」（桜井<sup>1</sup>206）など、若干の相違を指摘する研究者もいる。

巫：（超特大な数珠<sup>3</sup>を繰り、節を付け、歌うように）～七月ついたちのほとけさま…～これは、あんた…、脳梗塞でなかった？

依：脳出血だったと思うんですけど…、直接の死因はね…。頭が痛いって、最後は亡くなったんですけど…。

巫：その前に病気はあるか、なかったかね？

依：ええ、ありました。

巫：そうでしょう？

依：再生不良貧血で。七ヶ月入院していました。

巫：はい。…んで、おたくの兄弟は五人います？

依：ああー、えーと、父親の兄弟は六人ですけど…。

巫：いや、…いや…。

依：私ですか？

巫：あんたの父親でしょう？いま言うのは…？

依：私の他には、姉が一人です。

巫：ほうじゅうで（？）亡くした、死ななかった、というか、まだ、母は健康でないの？

依：私の母はまだ生きています。

巫：ねえ。（数珠を繰り、節を付けて歌う。口調変わる。）～おまえのたにんのこたえで～す。  
～（？意味不明）これは、父親とは何かいうことを、お話したいことを告げて下さいよ。  
～おまえ、私と言う…～。いゃ～お父さんです。

依：お久しぶり…。

巫：こんな身体になるとは夢にも思ってもなかった…

依：はあー…

巫：わかる？

依：はい。

巫：誰が何というても、な～んも幸せもしないで…。これだけは心について下さい。

依：はい。

巫：わかる？

依：はい。

巫：今では何とも思うてもどうにもならぬ。申し訳けできない。お母さんも、家族、あれあれ、これこれといっても自分の思うようにできなかった。わかる？ 今だになれば、うちの家内にも相当苦勞をしました。わかる？

---

3 図3（文末）を参照。

依：う～ん。

巫：おら、病弱だから。わかる？ 今、何といっても、どこの病院へ行ってもなかなか丈夫になれなかった。わかる？ 丈夫にないから、急にいろいろと病弱になったのです。親の病弱は？

依：う～ん、そうですね。なんか腰がヘルニアで、まあ～、あと肋膜炎とか何かやっていたみたいです。

巫：そう、いろいろな病弱で…。家内に、自分の家内にまで苦勞をかけて、ずっと続いてきたの。わかる？

依：はい。

巫：で、この頃、私の家内が、身体、弱いと思いませんか？

依：はい。大分、やっぱり、そろそろ気弱になってきて……。

巫：そう。まだ歩いているけど、身体は思うように…。心配です。

依：ええ、そうなんです。

巫：わかる？

依：はい。

巫：だから、あんたが健康であつたら、母親の看護をよろしくお願いします。

依：ああ、成程。そうなんです。それである、母親は、来年でも私のところに来て、世話になりたいと言っているんですよ。で、やっぱり、あの～、初めは、長女、姉の方に面倒みてもらおうと言っていたんですけど、まあ、そちらは事情がありまして、次女の私に面倒みてもらいたいと言っているんですけど…。やっぱり来年頃は引き取って見た方がよろしんでしょかね？

巫：それは、墓がどうなります？

依：あつ、墓は、母は、あの～、まあ、お寺の本山に、京都の、永代供養を頼もうかなと言つてて、墓石の方は、まあ、しばらく岐阜の方に置いとこうかと言っているんですけども……。

巫：やっぱり、あっちゃこっちゃ……。

依：はい。動かさない方がいいですか？

巫：動かさないで…。それはあの、お母さんことは、連れて来てもいいんだけど、墓まで動かす必要はないです。

依：ああ、やっぱり、そうですね？ で、それも一つねえ、懸案事項だったんですよ。じゃ、そうします。私たちがずっと今のところへ住み続けるか、どうか、わかんないから、お墓はちょっと無理じゃないかと思ってたんですよ。

巫：うん、無理です。

依：あつ、やっぱり。ああ、成程。で、母は引き取った方がいいですね？ 私が？

巫：いや、お宅の方へ行くのであれば、どん<sup>きょうだい</sup>だい姉妹、みんな和解して、おらの、親はいなくともゴタゴタしないようにご協力お願いします。わかる？

依：ええ、わかります。

巫：何と言うても、墓はお墓ですから、あっちゃもお墓ある、こっちゃも骨（コツ）あると言ったってダメです。

依：ハアー、じゃ、骨と、骨は…、その、京都の本山に、つてしない方がいいんですか？

巫：そうです！

依：ハア～、ハア～。

巫：そうせねば、ダメです。

依：ハアー、じゃ、お墓は、ちょっと遠いと、こう、しょっちゅうは行けないですけど、それは行けるときに行けばよろしいですか？

巫：ハイ、そうです。それは行けるときに行けば結構です。

依：ハア～、ハイ。わかりました。本当ねえ～…。

巫：あっちゃ、こっちゃ、みんな墓ばもって歩いて、墓はタンスの引き出しでないから、それはよーくご協力お願いします。

依：ハイ、わかりました。

巫：わかるねえ～。何と言うても恐（おそれ）お山の中でおみど（お冥土？）はみんな、それぞれに心がけているから、あれじゃなあ、これじゃなあでも思うようにもできないし、思うようにならないことです。それだけは、よーく頼みます。

依：ハア～。

巫：あちゃこちゃ、墓を、あちゃも置き、こちゃも置きしないで、ひとまとめに……。

依：ひとまとめにしておく…。ハイ、わかりました。

巫：連れて来てもいいから、それだけ、お願いしま～す。

依：ハイ。じゃ、あの～、母が亡くなった後は、まあ、それはひとまとめにして京都に移しても何でもいいわけですね？

巫：それは何でもないです。

依：ああ、成程。母が活着ている間は、その～、岐阜に墓はチャンとそのまま置いてた方がいいってということですね。父のお骨を……。

巫：そう。

依：ハア～、わかりました。

.....

依：じゃ、あの…、それで父は、あの、あの世で元気にしていますでしょうか？

巫：私は、おかげさまで、チャンと丈夫におさまっています。

依：ハア～、成程。

（ここから占いに入る）

それで、アノ～、アレですけど、孫に当たる人ですけど、私の娘が、来年結婚しようなん  
ですけど、あの、多分、いい縁組だと思わうんですけど、私から見たら。

巫：大丈夫です。

依：で、相手の人が、今、就職しよう…、できるかどうか、というところなんですけど、今、出  
願しているんですけど、就職うまくできそうでしょうかね？

巫：ゆるぐない（楽でない）です。

依：え？ いいですか、大丈夫ですか？

巫：大丈夫でない、です。心配です。

依：ハア～、成程。ウ～ン、なかなか難しいんですねえ。結婚に関してはいいんですか？

巫：そうです。それは大丈夫です。

依：ああ、成程。じゃ～、あの、もう一人の、また、私の息子さんの方ですけど、孫ですけど…、  
男の子ですけど、まあ、進路いろいろ悩んでいるんですけど、まあ、うまく、行きますで  
しょうかね。

巫：うまく行くよ。

依：ああ、そうですか。今、薬学部なんですけど、まあ、将来は、そっち以外の方面へ行こう  
とか、何とかかんとか、迷っているんですけど、うまく行きますか？ 就職とか、まあ、  
将来なんですけどね。

巫：うまくは行くと思います。

依：ああ、そうですか、よかった。そうか、で、娘の相手の人の就職はちょっとわからないん  
ですね？

巫：そうです。

依：ああ、成程。で、私が何かできることがありますかしらね？

巫：いや、おめえもできないことはないが……。

依：ハッ？

巫：ま、順調に進んでやっていくから。

依：成程。

巫：自分でも、やっぱり寒くなれば、足下に注意して…（音声不明）やってもどうにもならな  
い。我々ちゃんとしてもカンゼンと（？）守ってやるから大丈夫です。

依：ああ、そうですか？ それで、アノ～、来年同居しような母ですけど、ま、しばらくは元  
気でいきますかしらね？

巫：そうです。墓はチャンと守ってやります。

依：ああ、お墓ですね、ハイ。

巫：そんなこと忘れないで下さい。

依：ハイ、ハイ。

巫：本当にありがとう。わかる？

巫：本当にありがとう。

依：ハ～イ。

巫：（節をつけて歌う）～極楽成仏上がります、娘と霊との会話です～。ハイ、お粗末さまで  
す。

依：ありがとうございました。

## Ⅱ 考 察

### 1. イタコについて

柳田国男は「巫女考」において彼の郷里、播磨（現兵庫県）には、「神社に付属してその旧境内に居住して」もろもろの「神事に関与する」ミコと、今一方で「タタキミコとも口寄せとも呼」ばれ、どこの出身ともわからない「遠方から来る旅行者」のミコという二種類の巫女がいる、としている（柳田<sup>1</sup>307）。さらに「この口寄せというのは古い語で、その意味は隔絶して近づくべからざる神または人の言語を、眼前の巫女<sup>ふじよ</sup>の口を介して聞くこと、すなわち託宣・託言を聴かんと求むることであって、従ってその仲介を業とする女をも口寄せと呼ぶ」（柳田<sup>1</sup>307）と述べている。また、イタコという名称についても「奥州では一般に口寄せの巫をイタコという。これは多くは盲目の女である」（柳田<sup>1</sup>310）と記している。柳田はここで、いわゆる「神社ミコ」と「口寄せミコ」という、「以後の巫女研究の出発点ともなる」二つの類型を提示しているのであるが、この「ふたつの相違の指標はなにかといえば『口寄せ』（山下565）なのである。

むつ市商工会議所のホームページでは「イタコ情報」として次のような説明を付している。

イタコは生れながら幼くして盲目・半盲目になってしまった女の子が、生活の糧のために師匠のイタコへ弟子入りし、苦しい修行を経て、能力を身につけて独立する。

現在、むつ下北地方にはイタコは見当たらない。恐山にいるイタコは他の地域（津軽、八戸地方など）からやってくる。

<http://www.mutsucci.or.jp/kanko/itako-0.4htm>

筆者が見学した「恐山秋詣り」に参加したイタコの数は往時（昭和45年7月20日～24日）の40余名（東北学院民俗研究会157）から、その四分の一にも満たぬ7、8名に減少していたが、

そのうち、我々が直接「口寄せ」を依頼したイタコ＝平田アサさんもまた他県の出身であった。彼女の来歴を以下に記す。ただし、前述した通り、三十数年前も以前のものである。

平田アサ女 四十歳 西津軽郡鯉ヶ沢七ツ石

三歳の時に失明し、祖父母の世話でイタコになる。師匠は木造玉道に住んでいた工藤ソトという人で、そこで十二歳～十三歳まで修行し、十三歳頃から商売に出るようになったが、正式にイタコになったのは十七歳。師匠は十八年前に死亡。

(東北学院大学民俗学研究会157)

平田アサさんの場合も「師匠から日常生活での立ち居振舞いや家事を教え」(川村<sup>1</sup> 122) 込まれる、いわゆる「女中がわりの」勤めに加えて、神おろし<sup>4</sup>に入る際は「日数は決まっていないが朝昼晩の三度、水垢離(白装束での行水)を切って食事の塩断ち、火断ち」(東北学院大学民俗研究会157) など、四年間の厳しい修行を経て一人前の巫女(成巫)になったわけであるが、その主要な仕事の一つである「仏おろし」について彼女は次のように言っている。

…仏の命日がわかれば、その日の仏達が多く出てくる。次に依頼者からの死の原因を聞いて、多くの仏の中から捜し出す。この時、イタコ自身は自己の身体の変化はわからないし、又、視覚に訴えるものもなく、自分で口にする言葉もわからない。言葉の通じない他宗教の外人であっても、イタコには正式の日本語であられる。時々、呼ばれない仏や、間違っ  
て出てくる仏があるが、これは、依頼者と関係のある仏や供養されていない仏などで、出たくて出てくるのでどうすることもできない。この時、イタコ自身は感じがすこし常と異なるが、わからない。仏おろしの最中、口調が変わるのは仏の生前の性質によるもので、イタコ自身にはわからない。

(東北学院大学民俗研究会158)

ところで、「口寄せ」には古口と新口があり、この恐山の口寄せは「死後百ヶ日を過ぎた新口」に限るという「きまり」があるが、それは「仏は百ヶ日が過ぎていないと、地獄、極楽の区別ができない」(同上) からであり「又五ヶ月以前の子供もおろせない」(同上) という。なお、これらはどちらもいわゆる「死口」であり、恐山のイタコは行わないが、「生口」という「生霊をおろす」口寄せ<sup>5</sup>もある。

4 口寄せには、もろもろの「神の言葉や意志を語る、占い、予言的なもので、物事の吉兆、善し悪し、安全祈願、病気回復といった悩みを解決してくれる」(むつ市商工会議所ホームページ)「神おろし」と、「仏おろし」と呼ばれる「死者の世界にいる先祖や肉親・友人・知人と現世に生きる人との仲立ちをし、今は亡き人の意志を伝達する」(同上)もの、の二種類ある。

5 太平洋戦争中、出征した夫や息子の安否を気づかい、彼らの霊をイタコに頼んで呼び出してもらった家族があったが、このように生者の霊を呼び出すことが「生口」である。

## 2. 比較宗教学におけるイタコの位置

イタコのような、霊を取り扱う宗教的職能者（霊能者）は、宗教学的な見地からは、どのように看做されているのであろうか。通常言われているように、彼女らをシャーマンという枠組みに入れてよいものだろうか。ここでは文献調査によって宗教人類学、もしくは比較宗教学上のイタコの位置を考察してみよう。

ミルチャ・エリアーデ（1907～86）はその著『シャーマニズム』（邦訳1974、原著仏語版1951）において「シャーマン、シャーマニズムという言葉はもともと北方・中央アジア民族の呪術-宗教形態、およびそれにたずさわる人々を指す用語」（エリアーデ6, Eliade4）であるとし「シャーマニズムは厳密には、古代的エクスタシー技術—同時に神秘主義であり、呪術であり、広義の「宗教」—の一つである」（エリアーデix, Eliade xix）と述べている。彼によればエクスタシー（脱魂）がなければ純粹のシャーマニズムとは言えない、ということになるわけである。このエリアーデは来日の折、松島の巫儀<sup>セアンス</sup>に参加したあと、感想として「おそらくこれは、厳密な意味でのシャーマニズムではあるまい。エクスタシーが欠けていることが決定的である」（エリアーデ3）と語ったが、もし彼が恐山のイタコを見ても、同様の感想を洩らしたであろうと思われる。なぜなら、筆者が見学した「口寄せ」において、イタコが数珠を繰ったあと、いわゆる「神憑り」状態になって仏をおろす際、確かに抑揚は変わった（I「報告」56頁参照）が、しかし仏を生前に知るものとしてそれは決して「故人の声」ではなく、それまでと同じイタコ自身の声であり、また彼女自身の意識にも何らかの変化が生じたようにはとても感じられなかったからである。しかしこれについては、後にも触れることになる。

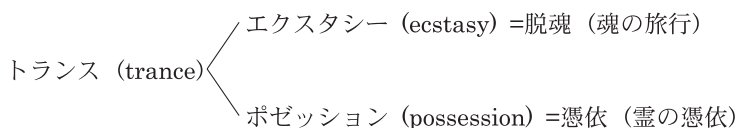
エリアーデによれば「シャーマンの霊は」このエクスタシーの間に「その肉体から一時的に離脱し、天に上昇し、地下に下降し、もしくは空間遠く旅立つ」（エリアーデxv, Eliade5）いわゆる「魂の旅」（ecstatic journey）を行う（佐々木<sup>1</sup>30）のだ、と言う。

このようなエクスタシーを重視するエリアーデの見解に対して真っ向から異を唱えているのが、スコットランド生まれの人類学者、I.M. ルイス（1930～）である。彼は、ツングース族（シャーマンという用語はツングース語のサマンに由来する）の「シャーマニズム」においては、エクスタシー（脱魂）型よりも、ポゼッション（精霊憑依＝憑霊）型の方が主体であることを主張している<sup>6</sup>。つまり、シャーマンの魂が一時的に肉体から離脱して依頼者の病気その

6 ルイスは、「憑依には非自発的（または非統御的）なものと、自発的（または統御的）なもの」の二つがあるとし、さらに「統御的憑依を業とし諸精霊を『駆使する』人々が北極地方のコンテキストにおいて『シャーマン』と呼ばれる人々である」（ルイス72, Lewis49）と述べ、エリアーデの見解が「実地調査に基づく証拠によって裏書きされるものか」（ルイス51）との疑問を発している。「M. エリアーデの著作におけるシャーマニズムに関する知識と材料は、ほとんど、このハルヴァに負っている」（田中514）とあるように、フィンランドの比較宗教学者ウノ・ハルヴァ（1882～1949）や、ツングース族研究におけるロシアの権威セルゲイM.シロコゴロフ（1889～1939）らの先駆的研究に多くを依存しているようである。



他の原因と考えられる「霊」を探求するエクスタシー型に対し、このポゼッション型は、霊の方がシャーマンに憑依するのである。このようにシャーマンの分類は単純化すれば、以下図示するような二つのタイプに大別されるといってよい。また、これらは、トランス（平生意識の変容=神憑り状態）という言葉で一括、統一することができる（佐々木35）。



例えばスウェーデンの宗教人類学者フルトクランツが「エリアーデの定義はあまりに限定的である」と述べ、「憑霊状態になって役割をはたす人物としてのシャーマンを強調」（佐々木<sup>1</sup>31）しているように、現代の人類学において「エリアーデの脱魂の概念は狭すぎる」（同上）と批判する学者が少なくない。佐々木宏幹氏は「日本のシャーマンの職能者が霊的存在にかかわる仕方は『カミおろし』、『ホトケおろし』の語に示されているように自己に向けてカミやホトケの霊を迎えおろし、憑依させることが主要な傾向になっており、逆に自己が霊的存在の居場所まで出かけて行くというモチーフは、少なくとも現代のシャーマンにおいては明瞭に見られない」（佐々木<sup>2</sup>177）と述べているように、恐山のイタコの場合は、憑霊型のシャーマンと看做すことができると思われる。このように、多くは憑霊型に属すると思われる日本の霊能者であるが、佐々木氏は、第三者に対する語り方、態度によって区別しうる例として岩手県釜石市の「オカミサン」と「イキガミサン」という二つの型を挙げている。つまり、「第一人称で、自らに憑依した神仏の代弁者を勤めるオカミサン」に対し「神前で呪文を唱えるが、神がかりにはならず自己の靈感を依頼者に解説するイキガミサン」の二つであり、「前者は盲目で女性、後者は目あきの男性である」（佐々木<sup>2</sup>195）と言う。同氏はさらに「この場合、オカミサンはR.ファース<sup>7</sup>の意味における霊媒（シャーマン）であり、イキガミサンは予言者である」（同上）と付け加えているのだが、恐山のイタコの場合は、先の例で言えば「オカミサン」と同様に、一人称で「仏」のメッセージを伝えていた（I「報告」参照）ので、「霊媒型」ということになる。

以上、要約すると、エリアーデの比較宗教学上の定義によれば「巫流のシャーマン」ということになるが、現代の人類学、宗教学の大勢からすると、恐山のイタコは憑霊型、しかも霊媒型（medium）の「典型的なシャーマン」と捉えることができよう。なぜなら、「シャーマンと

7 ファースは「トランス状態において超自然的存在に直接接触・交流して役割を果たす人物を霊媒（medium）と予言者（prophet）に区分し、前者は神自身として行動するのに対して、後者は神の意志の代弁者として行動すると性格づけている」（佐々木<sup>3</sup>13）。

は靈的存在<sup>8</sup>との直接交流・交通できる力能をもつ人物」という共通の認識に加えて「今日の学界一般の傾向としては、広義にとってシャーマニズムを文化現象の一つとして捉えようとして」（桜井<sup>14</sup>）いるからである。特にG.K.ネルソンの場合、シャーマンの概念をさらに敷衍、拡大させて「神秘家」、「予言者」、「霊媒」、「治癒師」、「呪術師」などはすべてシャーマンのカテゴリーに入る（佐々木<sup>71</sup>）としているほどである。なお、シャーマニズムの定義としては「通常トランスのような異常心理状態において、超自然的存在（神、精霊、死霊など）と直接接触・交流し、この過程で予言、託宣、卜占、治病行為などの役割をはたす人物（シャーマン）を中心とする呪術-宗教的形態である」（佐々木<sup>41</sup>）を挙げておく。

### 3. 社会的・文化的機能から見たイタコ

我々の直前に「口寄せ」を依頼したのは、地元出身と見受けられる、まだ若いカップルであったが、女性の方が亡き祖母の霊を呼び出してもらっていたようであった。理由は定かでないが、彼女は何かしら生前、この祖母に対して孝養を尽くしていなかったのが心残りであったようで、いざ、「祖母」との対話の機会が訪れると、感極まって涙、滂沱、という有り様であった。合理的な科学思想の浸透、普及とともに、西洋医学万能の風潮が瀰漫している現代の常識からして、通常はおそらく児戯に等しい「迷信」としてしか顧みられない、死霊との対話を事とするこのイタコのような「霊能者」が、今なおこの地方に残存している理由は何であろうか。それは、東北地方に限らず日本列島の住民が「死者の霊魂に対応する口寄せなどの『商売』を行う、宗教職能者を必要として」（川村<sup>117</sup>）いるから、という他はあるまい。そこには日本人の「死生観」とも関連する特殊な宗教意識、精神構造を考える必要があるであろう。何となれば我々の中で、少なくとも一年に二度、正月や盆休みには帰省して墓参りをし仏壇に火を点して、帰ってくる祖先の霊を迎え、送り返す、という習慣を持たない人が果たして何人いるであろうか。柳田国男が「日本人の死後の観念、すなわち霊は永久にこの国土のうちに留まって、そう遠方へは行ってしまわないという信仰が、おそらくは世の始めから、少なくとも今日までかなり根強くまだ持ち続けられているということである」（柳田<sup>61</sup>）と考えたように、もともと日本人は、キリスト教徒のように善悪二元論に基づいて死者を天国と地獄に峻別する他界観念を持たなかった。この身近なところ（例えば子孫の住む村落を見下ろす小高い丘など）に留まった我々の祖先の霊は「往生してまた帰ってくる、生れ変わってこの世にまた帰ってくる」（梅原<sup>98</sup>）<sup>9</sup>からである。

8 E.B.タイラーは古代人や未開人の中に見られる「靈的存在に対する信仰」をアニミズムと称し、これをもって宗教の起源と考えた（タイラー100, Tylor 424）。シャーマニズムが存在する前提条件として、霊の存在を認め、「人間以外のもの、動物や植物にも霊があるし、石や水、さらに風のような無生物も霊魂を持ち、そしてこの霊魂は、宇宙を浮遊、運動して色々なものに宿る」（仁戸田138）と考えるアニミズム的世界観の共有がその基底部分として考えられる。

9 梅原猛氏は親鸞（1173～1262）が『教行信証』で述べた「往相・還相」という二種の廻向が浄土真宗で最も重要な思想だと主張している。これはアニミズム的な日本古来の霊魂観と仏教の融合であり、このように死者の魂が、この世とあの世の間を無限に往復を繰り返すというのが原日本人のカミ観念であった、と同氏は述べている（梅原<sup>50-60</sup>）。

このように常に霊と身近なところで接触する可能性のあるアニミズム的な日本の精神風土においては、合理主義的思考が蔓延したかに見える現代においても、とき折その間隙を縫って奇怪な事件を生み出す可能性を孕んでいると言える。今なお解決したとはいいがたい「オウム真理教」の起こした一連の事件はその典型であろう。スプーン曲げとか透視、予言などの「超常現象」が戦後しばしば話題になったが、現在でも水面下においても根強く継続・進行していると見られるのが、1970～80年代に流行したオカルトブームである。その一端として「コックリさん」<sup>10</sup>とか「キューピッドさん」など十代の少女を中心に流行った「憑依ゲーム」があった。このような大人や学校の教師に隠れて秘密裏に行う遊びには当然危険が付きまとうのだが、そのスリルを楽しむというのがまた、イマジネーションの欠如した現代社会における児童の側面でもあるらしい。

さて、危険な一面とは、こうしたゲームに失敗して呼び出した「霊が離れなくなること」なのである。そうした失敗例の一つとして以下の「症例」を挙げる。

…『ハロウィン』1987年1月号の「コックリさん体験特集」に体験記を寄せた、ある少女（以下、少女Aとする）は、コックリさんを行っている最中に、悪寒が生じ、ついでひどい頭痛が始まった。コックリさんをやめると、悪寒は消えたが、頭痛の方はいっそうはげしくなり、翌日から学校を休みがちになった。「脳神経科、精神科など、いろんな病院」に行ったが、「原因不明」であり、「精神安定剤をただ投与されるばかり」であった。少女Aの両親は彼女の知らない間に「霊能者」を訪れた。この霊能者の「遠隔霊視」によって、少女Aに「憑いていたのは母の姉の別れた亭主で、頭痛もち」であり、「交通事故で死去し、無縁仏となっていたのを供養して欲しくて、コックリさんを通じて……取り憑いた」ことが明らかにされ、「除霊、供養」が行われた。すると、少女Aの頭痛はたちまち治ったという。

(川村<sup>2</sup>25-26)

つまり、こうした「憑依ゲーム」における危険とは、「『無縁仏』や『死霊』『下級霊』『邪霊』などに取り憑かれること」、さらには頭痛を初めとする「心身不調などの不測の事態が引き起こされること」(川村<sup>2</sup>27)であるが、心理学的、合理的な解釈をすれば、少女Aの場合は、

10 「こっくりと呼ばれる狐のような動物霊（狐狗狸の字を当てることもある）を憑依させて託宣を得る、民間で行われる占法の一つ。初期の頃は、三叉に組まれた棒の上に盆を乗せ、軽く指をそえながら精神を集中させ、そこにこっくりを憑依させた上で質問を出し、盆や棒の動きを見て判断するという技法が主流だった。近頃は、十円玉等の小物に数人の人差し指を乗せておき、それが紙の上に記した五十音や数字などの上をたどる様子から託宣を得るといった技法が一般的である。最初に流行したのは明治20年頃で、その後戦時期の前後にたびたび流行し、最近では1970年代のオカルト漫画の流行に連動する形で小中学生を中心にブームが再燃した」(鈴木194)。

コックリさんという霊の存在を「本当に信じ込んで暗示にかかった」ということになる。しかしこのような説明では到底病気は治らず、彼女は霊能者の説明「無縁仏に取り憑かれた」という説明の方を信用して「除霊、供養」を施され結局治ったのである。これは、「霊の遍在」（宇宙には色々な霊が浮遊しているという考え）を事とするアニミズム的風土における病気治療の一例に他ならないが、「賽の河原付近にいる」（東北学院大学民俗研究会158）という仏をおろす恐山のイタコの「口寄せ」のメカニズムにも酷似している<sup>11</sup>ことがわかるであろう。

青森県などの東北地方に限らず、通常は「頭痛」や「下痢」、「便秘」、「胃の不調」などの「慢性症状」に悩む患者は、最初はむろん内科的な疾患と考えて病院を訪れるが結局治らず、医師にも見放された場合、イタコなどの「霊能者」や新興宗教に頼る場合が少なからずあると思われる（この反対に癌や胃潰瘍など明らかな疾患を持つ子供や家族を信仰によって治そうとして手遅れになった信者の話も聞く）。そしてそれが、明らかに精神的原因である「心身不調」の場合には、現代医学の「科学的因果関係にもとづいて診断され治療」されるよりも、新興宗教や霊能者が「宗教観・超自然的因果論にもとづいた解釈・説明を用いて判断し」（川村<sup>2</sup>31）行った治療の方が有効なケースが稀にある<sup>12</sup>、ということになるろうか。繰り返しになるが、「霊の遍在」を信じるそのようなアニミズム濃厚な社会的文化的風土が、イタコなどの職能者を受け入れる素地となっているのであり、その意味において、イタコは地域社会において必要な医療活動の一環を担っていると言えるのである。

#### 4. イタコの霊力—闇の中の「開眼」

イタコをはじめ、瞽女<sup>13</sup>など盲目の女性たちはどのような理由で失明に至ったのであろうか。むろん、生まれつき目が不自由だった場合もあるが、彼女らが、幼児期に視力を失った原因としては、さまざまな理由が考えられる。

まず考えられるのは、この地方における眼科医の不足のために、貧困より惹起された栄養失調や、その他眼病による視力低下に対して適切な治療が行われなかったか、あるいは治療が手遅れになったことである。さらに農作業中の怪我や、冬の長いこの地方の生活環境によるものとして炉端で燃やした薪の火の粉が目に入ったための失明などがある。しかし今なら「迷信」として一笑に付されようが、当時は盲目の要因として大真面目に考えられたものの一つとして

11 憑霊ゲームにおいて少女らが自己暗示によって「こっくりさん」や、「キューピッドさん」になるというのは、被験者が術者の暗示によって他人格になる催眠術の原理と同じ（森田<sup>3</sup>186）であるが、俳優が劇中の人物に「なりきる」こと、つまり「迫真の演技」をするのも、この自己暗示によって説明できる。イタコの場合は、特に修行によって憑霊・憑依を自在にコントロールできる域に達した「シャーマン」（注6参照）と言うことができる。

12 むろん、かえって「症状」を増悪さえ、取り返しのつかない危険な事態に陥る可能性もなしとしない。

13 瞽女とは「盲御前（めくら・ごぜ）の略で、盲目の門付け女芸人。鼓・琵琶などを用いて語り物を語ったが、江戸時代以降、三味線の弾き語りをするようになった」（松村881）。長塚節の『土』（明治43）の中では口寄せを行う瞽女が登場するが、水上勉の『はなれ瞽女おりん』（昭和50年）では大正時代、日本海を背景に新潟・富山・福井を渡り歩く盲目の女旅芸人が描かれている。

「因果応報説」がある。つまり、先祖や本人の前世の罪業に起因するというものである（川村<sup>14</sup> 93-97）が、彼らは全盲という悲運に加えてこうした謂れのない偏見の犠牲者でもあったのだ。ところで昭和の初期までの日本では、盲目の女性が就く職業としては、イタコ、瞽女、按摩、三味線引き、三味線の師匠、義太夫・浄瑠璃語りなどがあったが、都会とは異なり、東北地方の農漁村ではイタコやオガミサマのような霊能者になる<sup>14</sup>か、あるいは瞽女のような旅芸人になるしか他に道がなかったようである。さらに盲人の娘をイタコや瞽女にするため、両親は借金までして相当な高額の謝礼を払い、「弟子入り」－「カミツケ式」－「礼奉公」－「身上がり」と段階を経る毎に「御祝儀」をはずんだ（川村<sup>14</sup>112）、という。しかしこのような風習は裕福な両親に限らず、たとえ実家が「経済的負担に耐えられない場合」も「さまざまな方策が講じられていて」「地域社会総がかりともいべき『ザルマワシ（笹回し）』という「互助金」によって援助された。つまり、これらの盲目の女性は「イタコ（オガミサマ）になることによって地域社会に包摂されるように制度的に位置づけられていた」（川村<sup>14</sup>112）のである。

ところで生まれつきにせよ、あるいは幼時にせよ永久に視界を鎖された「盲人」の特徴として精神の働きが鋭敏で極めて「勘」が鋭い、ということがよく言われる。それは失明という永遠の「闇」の中で、常に自己の内部と向き合わなければならない、その状況において獲得された第二の天性なのではあるまいか<sup>15</sup>。逆説的になるが、彼らは不断の「自己内省」によってむしろ晴眼者以上に人間精神への「開眼」の機会を与えられているとは言えないだろうか。「口寄せ」や予言、占いなどで常人を驚かすイタコの「超能力」<sup>16</sup>は、このような絶えざる「自己凝視」の中から生まれた、とも言う<sup>17</sup>のである。「介在する時空の『距離』、『遮蔽物』を一瞬にして無に帰して『対象』に到達する『光』のように、瞬時にして実在を看破するその電撃的な『直感力』」（神徳23）こそ、彼女らの「霊力」の秘密ではあるまいか。

14 シャーマンになる方法としては次の二つが考えられる。「①神や精霊が特定の人物を選んで試練を課し、強制的にシャーマンに仕上げるもので召命型と呼ばれる、②いろいろな理由で個人がシャーマンになることを志し、多くは先輩シャーマンの指導により、学習・修行を続け、一人前になるもので修行型と呼ばれる」（佐々木<sup>14</sup>344）。平田巫女もそうであるが、イタコの場合はほとんど②の修行型であるのに反して、沖縄の霊能者、ユタ、カンカリヤーなどは①のケースがほとんどである。

15 43歳で失明して後に『失楽園』（1667）、『闘士サムソン』（1671）などを書いた英国のピューリタン詩人、ジョン・ミルトン（1608～74）は、「我々は本を一冊も読む必要はない、ただ自分の心の奥を探り探れば大詩人になれる」と言ったが、古今東西を問わず盲人の「音感」や「記憶力」には定評あるところである。我が国でも八世紀、稗田阿礼が『古事記』（712）編纂のために「帝紀」、「先代の旧辞」を暗誦したと言われ、また中世では平家の怨霊に取り憑かれた琵琶法師・芳一の奇譚、現代でも琴の演奏家、宮城道雄の例とか、最近ではメロディをすべて暗記するというピアノの演奏家など、少数ながら音楽や芸能の世界で目覚ましい活躍する人々もいる。

16 むろん彼女たちの「口寄せ」や「占い」、「予言」の内容のすべてが「真実」だというのではない。Iの「報告」に掲げた「口寄せ」や、予言めいたイタコの言説は、後から吟味して当たっている場合もあったが、そうでない場合もあった。「イタコ情報」（むつ市商工会議所ホームページ）でも述べられているように「口寄せ」が「“当たる、当たらない”ということより、依頼者の悲しみや悩みを軽くし癒しの役割を果たしている」ことにその存在意義があったし現にある、というべきであろう。

17 柳田国男が「妹の力」（大正6）で述べている女性一般の「霊力」とか、カミツケ式など、修行においてマニュアル化した教科内容を単に暗記するイタコ教育のみではこのようなイタコの「超能力」は説明しきれないと思われる。

## 5. 展望：イタコ<sup>このさき</sup>の未来

恐山のイタコの数が激減していることは既に触れた。現代医学の向上、特に眼科医の普及とともに、また生活状況や社会的、経済的条件の改善とともに、かつては盲目という障害に苦しんだ人々が激減していることは容易に頷けることである。したがってこれは、本来喜ぶべきことかも知れないが、しかしおそらくは、家族の厄介物として生涯を終えなければならなかったであろう、これらの人々が、イタコや瞽女、あるいは按摩になることによって自立し、それによって地域社会に貢献していたこともまた、事実なのである。現在でも「盲人の職業はきわめて限られて…三療家（マッサージ・鍼・灸）以外にこれといった職はなく、晴眼者の進出により、それにすら就くことが困難」（川村<sup>1</sup>108）なのが実状だという。医療制度や福祉制度の充実、拡大もさることながら、戦前のような暗いイメージとは違った意味でハンディキャップを背負った人々が職業人として自立し独立していけるような制度や、さらには視覚障害者に対する偏見のない社会を作り上げることが尚更に必要なのではなかろうか。

以上勘案すれば、純粋な意味で、恐山のイタコのような盲目の女性霊能者が、いずれ姿を消すことは時代の趨勢としてやむを得ない状況と言えるかも知れない。しかし、筆者が見学した際も、都合七、八人のイタコの中には、僅かながら目の見える人や、「晴眼者」もこれに加わっていたのである。従ってこの東北地方からイタコの「口寄せ」が完全になくなるとは思えないし、いわんや日本列島から類似の「霊能者」がいなくなる日など想像することもできない。これを要するに、先祖を大事にして盆や正月には欠かさず墓参する我々の風習が廃れない限り、すなわち、靈魂を身近な存在とみなす日本人の精神風土が変わらない限り、イタコを初めとするシャーマン的な「宗教職能者」が日本列島から姿を消すことはないであろう。

**参考文献：**（\*印は小論で直接、引用、あるいは言及したものであることを示す。）

### 1. 和文のもの

\* 梅原猛<sup>1</sup> 『日本人の「あの世」観』 中公文庫、1993年

梅原猛<sup>2</sup> 『森の思想が人類を救う』 小学館、1991年

\* 江田絹子<sup>1</sup> 「津軽のゴミソ」『巫女の世界』 谷川健一責任編集、日本民俗文化資料集成、三一書房、1989年、128-137

\* 江田絹子<sup>2</sup> 「青森と秋田のゴミソ」『巫女の世界』 谷川健一責任編集、日本民俗文化資料集成、三一書房、1989年、137-151

\* エリアーデ、ミルチャ 『シャーマニズム』 堀一郎訳、冬樹社、昭和49年

\* 川村邦光<sup>1</sup> 『巫女の民俗学—女の力の近代』 青弓社、1991年

\* 川村邦光<sup>2</sup> 『憑依の視座—巫女の民俗学』 青弓社、1997年

- \* 神徳昭甫 「「ヴェール」と「透視」－『ブライズデール・ロマンス』におけるシャーマニズム－『フォーラム』NO. 1, 日本ナサニエル・ホーソーン協会, 1991年, 22-30
- \* 桜井徳太郎<sup>1</sup> 『日本シャマニズムの研究上』吉川弘文堂, 昭和63年
- 桜井徳太郎<sup>2</sup> 『日本シャマニズムの研究下』吉川弘文堂, 昭和63年
- \* 佐々木宏幹<sup>1</sup> 『シャーマニズム－エクスタシーと憑霊の文化』中央公論社, 昭和55年
- \* 佐々木宏幹<sup>2</sup> 『憑霊とシャーマン－宗教人類学ノート』東京大学出版会, 1983年
- \* 佐々木宏幹<sup>3</sup> 『シャーマニズムの人類学』弘文堂, 昭和59年
- \* 佐々木宏幹<sup>4</sup> 「シャマン・シャマニズム」『文化人類学事典』石川栄吉他編, 弘文堂, 昭和62年, 344-345
- \* 鈴木健太郎 「こっくりさん」『日本民俗宗教辞典』佐々木宏幹・宮田登・山折哲雄監修, 東京堂出版, 1998年, 194
- \* タイラー, E.B. 『原始文化』比屋根安定訳, 誠信書房, 昭和37年
- \* 東北学院民俗研究会 「恐山のイタコ」『巫女の世界』谷川健一責任編集, 三一書房, 1989年
- \* 長塚節 「土」『日本の文学16 長塚節・鈴木三重吉・中勘助』中央公論社, 昭和49年, 5-232
- \* 仁戸田六三郎 『宗教学概論』稲門堂, 昭和44年
- \* ハルヴァ, U. 『シャマニズム－アルタイ系諸民族の世界像』田中克彦訳, 三省堂, 1989年
- フィンダイゼン, H. 『霊媒とシャーマン』和田完訳, 冬樹社, 昭和52年
- ホッパー, ミハーイ 『図説・シャーマニズムの世界』青土社, 1998年
- \* 松村明編 『大辞林』三省堂, 1989年
- \* 水上勉 『越後つついし親不知・はなれ瞽女おりん』新潮文庫, 平成14年, 82-235
- \* むつ市商工会議所ホームページ, URL : <http://www.mutsucci.or.jp/kanko/itako-04.htm>
- \* 森田正馬<sup>1</sup> 「心霊現象－森田正馬先生に物を訊く」『森田正馬全集第六巻』白揚社, 1975年, 499-508
- \* 森田正馬<sup>2</sup> “観相者の実験” 「生の欲望」『森田正馬全集第七巻』白揚社, 1975年, 210-214
- \* 森田正馬<sup>3</sup> 「催眠術の原理と暗示の作用」『生の欲望』白揚社, 昭和41年, 182-196
- \* 柳田国男<sup>1</sup> 「妹の力」昭和15年『柳田国男全集11』筑摩書房, 1990年, 15-61
- \* 柳田国男<sup>2</sup> 「先祖の話」昭和20年『柳田国男全集13』筑摩書房, 1994年, 9-209
- 柳田国男<sup>3</sup> 「こども風土記」昭和16年『柳田国男全集23』筑摩書房, 1990年
- 山下欣一 「解説」『巫女の世界』谷川健一責任編集, 日本民俗文化資料集成, 三一書房, 1998年, 565-577
- \* ルイス, I. M. 『エクスタシーの人類学－憑依とシャーマニズム』平沼孝之訳, 法政大学出版会, 1985年

2. 欧文のもの

\*Eliade, Mircea *Shamanism, Archaic Techniques of Ecstasy*, translated from the French by Willard R. Trask, Bollingen Series LXXVI, Princeton University Press, 1974

\*Lewis, I. M. *Ecstatic Religion, A Study of Shamanism and Spirit Possession*, Second Edition, Routledge, London and New York, 1989

\*Tylor, E.B. *Primitive Culture, Researchs into the Development of Mythology, Philosophy, Religion, Language Art, and Custom*, in two volumes, Vol. 1, London, John Murray, 1920.  
[Rights of Translation and Reproduction reserved], New York, G.P. Putnam's Sons

付記：小論は企画・準備中の著書『アメリカ・ルネッサンスの底流－シャーマニズムの「発見」』（仮題）の序章に相当するものである。

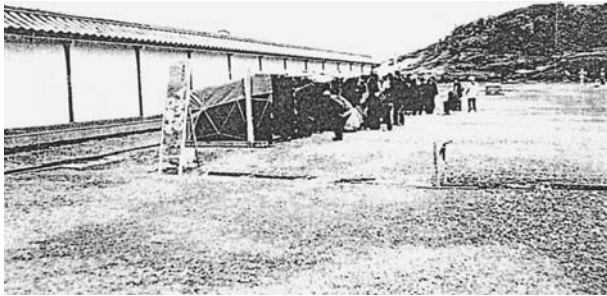


図1 イタコのか寄せ（看板）



図2 口寄せの風景  
（むつ市商工会議所ホームページより）



図3 平田アサ巫女